

## 例えばこんなこと、気になっていませんか？

### 生活のなかで

- 一人で遊んでいることが多い
- 相手の気持ちを理解することが苦手
- 冗談や比喩が理解できず、言葉どおりに受け取ってしまう
- 特定のものを持つことにこだわる
- 日課の変更に対して抵抗を示す
- 光や音に過敏に反応する

### 活動のなかで

- じっとしていられない、走り回る
- おしゃべりがやめられない
- 外からの刺激で注意がそれてしまう
- 質問が終わる前に答えてしまう
- 我慢ができず、かんしゃくを起こす
- 衝動的な行動をとる
- 忘れ物が多い

### 学習のなかで

- 自分の思いを適切な言葉で表現できない
- 形の似たひらがなやカタカナ、漢字を読み間違える
- 道具を使って作業するのが苦手
- 数の順序、大きさなどが分かりにくい
- 筆圧が弱かったり、強かったりする
- 漢字を独特の筆順で書く

わかってほしい！

子どもと関わっている中で、子どもの様子に不安になったり、子育てが難しいと感じたりしたことはありませんか？  
大人が「困った」と感じるときは、子ども自身も困っています。子どもの様子は、「生活のしにくさ」「理解のしにくさ」のサインであり、「気付いてほしい」「困っているよ」というメッセージかもしれません。解決策の第一歩は、子どもの行動そのものを見るのではなく、その困りごとを探り、どのように関わったらよいかを考えていくこと。そうすれば、子どもの育ちが変わってきます。

### こだわりが強い

興味や関心に偏りがあり、特定の遊びしかしない子どもや、ものや場所などに対するこだわりが強く、融通がきかない子どもがいます。

#### サポート例

- 子どものこだわりを否定しない。
- 勝ち負けにこだわる場合は、「負ける＝ダメ」ではなく、「一生懸命やった」などの勝敗以外の価値観に気付かせる。
- 前もって予定を伝える。



### じっとしていられない

衝動が抑えられない、感覚過敏でその状況に耐えられない、活動への関心が低い、もっと周囲から注目されたいなど、様々な原因が考えられます。

#### サポート例

- 厳しく叱らず、子どもの思いを受け止める。
- 席を立つ前に、許可を求めるルールを決める。
- 一つの課題の量(時間)を減らし、「できた」回数を増やす。
- 得意なことで集中力を発揮させる。



### 発音がはっきりしない

ことばの発達は個人差が大きいことを踏まえた上で、それぞれの子どもに応じた適切なサポートをしていくことが必要です。

#### サポート例

- 正しく発音ができなくても聞き返しをせず、話そうとする意欲を尊重する。
- 子どもの間違いをさりげなく言い直す。
- 安心して話すことができる受容的な雰囲気をつくる。



### 感覚の過敏さがある

特定の音や感触、におい、味などに過敏に反応する場合があります。本人にとっては不快な環境のため、強い不安や抑うつ状態になることも。

#### サポート例

- 感覚過敏の苦しさは本人にしか理解できないことを認識し、本人の不快さに寄り添う。
- 不快と感ずる音には、事前に告知をする。
- 不安を喚起させない環境づくりをする。



### 指示を聞かない、指示が通らない

指示が通らない背景には、周囲の刺激に気を取られやすい、口頭での指示内容が理解しにくいといった原因が考えられます。

#### サポート例

- ほかのことに気が散らないような環境をつくる。
- 大切なことだけを短く伝える。
- 絵カードや写真、実物などの視覚情報を活用する。
- 子どものそばで、目を見て話す。



### 身体の動きがぎこちない

発達面や経験の不足が原因で、歩く、走る、跳ぶ、投げる、道具を扱うなどに関して、自分の身体を上手に使うことが難しい子どもがいます。

#### サポート例

- 好きな遊びを通して、身体を動かす楽しさを体験させる。
- 簡単な運動から行い、達成感を味わわせる。
- 子どもの技能に合った活動をする。
- 道具の使い方を、順を追って説明する。



## ぜひやってみて！肯定的な行動支援

### 子どものよいところに目を向ける

子どもを見る場合、できない部分に注目してしまいがち。でも、「水へのこだわり」が「食器洗い」へ、「何でも並べる」が「整理整頓」へなど、成長とともに「得意なこと」につながっていくことも多くあります。「好きなこと、興味があること」は何か、「できること、できそうなこと」は何か、という情報がとても重要です。そこから能力を伸ばすことは、本人の自己肯定感を高める上でとても有効なことです。



### 具体的な言葉で「やる気」を引き出す

例えば、「まだ宿題半分しかやってないの」と言われるより、「宿題半分終わったね。もうちょっとがんばろう」と言われた方が、子どもはやる気を削がれずにすみます。また、抽象的な言葉から具体的な言葉へ、失敗した場面よりも成功した場面を想起させるなど、ちょっとした言い方を変えるだけで、理解がしやすくなります。

(例)「ほら、ちゃんとして」→「背筋を伸ばして、足は床にペタン」



### 「自己選択・自己判断・自己決定」の機会を豊富にする

本人が成功体験をし、自信をもって物事に取り組めるようにすることが支援の原則です。生活や学習の中で、子ども自身が考え、判断し、表現していく機会を存分に与えていきましょう。「できた!」「分かった!」「やってみよう!」「やってみてよかった!」という経験を積み重ねていくことで、子どもたちの生活の質は高まっていきます。「自分でできる」と自信をもたせることは、すべての子どもに通用する大事なものです。

### 「ほめる、認める」そして「共に喜ぶ」

子どもができたこと、がんばったことに対して、大いにほめてあげましょう。子どもにとって、自身の行動をほめてくれること、自身の存在を認めてもらえることは、大きな自信につながります。そして何よりも共に喜んでくれる身近な大人が存在することが大切です。このことで、子どもは、自己の価値を高めることができるのです。

子ども一人一人の特性や場面に応じて発生する困難さを取り除くための、個別の調整や変更を行います。これを「合理的配慮」と言います。学校や園では、本人や保護者との合意を図りながら、検討・決定を行います。